

# 江州草津宿における宿と「町」との関係

井 出 努

## 〔抄録〕

近年、三都や城下町の個別町とほぼ同様の性質を持つ「町」と称される集団が広く在方町内部に存在することが明らかにされつつある。しかし、この「町」をめぐる研究は、在方町における都市的側面を住民結合の点から強調する傾向を持っていた。そのため、在方町における農村的側面を視野に入れた「町」研究は手が付けられていなかった。そこで、本稿では都市的側面・農村的側面双方の視点から在方町内部における「町」の位置づけを考察した。その結果、草津宿においては、宿（村）全

体の結合が農業共同体的な機能を持つこと。「町」単位の結合が宿住民の生活共同体的な機能を持つと同時に、商業共同体的な機能を持つことが明らかとなった。このような共同体的機能の分化のあり方に、在方町特有の住民結合が認められると同時に、「町」結合の宿（村）結合に対する独自性を認めることができる。

キーワード…住民生活、住民結合、「町」、宿（村）、在方町

## はじめに

在方町内部に、三都や城下町における個別町とほぼ同様の性格を有する「町」と称される集団が広く成立していることが、渡辺浩一氏・深井甚三氏らにより明らかにされている<sup>2)</sup>。また、在方町の都市的発展により、農村としての住民結合とは異なる都市的な住民結合として

「町」結合が顕在化してくることが渡辺浩一氏により指摘されている。

ただし、従来の「町」をめぐる研究は、都市的側面の分析視角からの分析が進む一方、農村的側面を考慮にいれた分析はほとんど見られない。在方町の特性が、都市的側面ばかりでなく農村的側面をも併せ持つところにある以上、この分析視角は在方町における住民結合を分析する上では不可欠のものであると言えよう。このことを「町」研究

に引きつけて述べるならば、「町」結合を在方町における都市的性質の表れとして位置づけるだけでなく、農村的結合との関連性において位置づける必要があるということである。

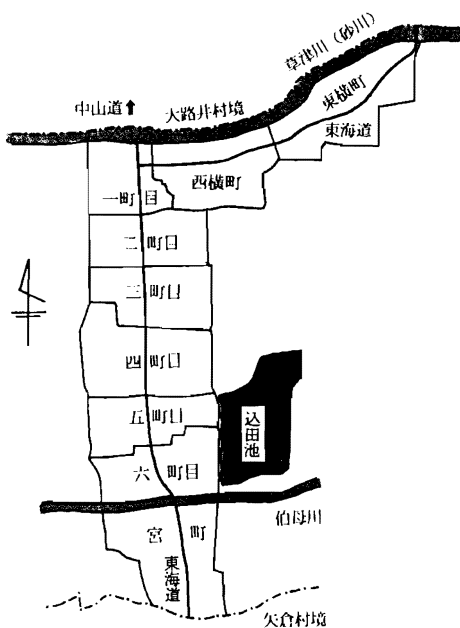
そこで筆者は、在方町の住民生活において、村および「町」が果たした役割と、その相互関連性を考察することにした。このことは、都市や村落といった単純な概念規定に包摂しきれない在方町独自の住民結合のあり方を探ることにつながる。なお、ここで言う村とは村請の単位となる集団を指す概念である。実際には、村の他に宿や町といった呼称を有する場合がある。

以前に筆者は、江州草津宿を取り上げ、宿内に九つの「町」が展開すること、これらの「町」が草津宿の村政に果たした役割を紹介した。しかし、これらの考察は主に「町」の機能面の考察にとどまり、「町」が村（宿）機構の一部として位置づけられる存在であるのか、それとも村（宿）とは異なる独自の位置づけを有する集団であるのかについては明らかにしていなかった。そこで、再び草津宿を取り上げ、住民生活における村（宿）や「町」が果たした役割の相互関連性を分析することにより、村（宿）結合および「町」結合の独自性を考察していきたい。

## I 草津宿の概要

江州草津宿は、東海道五三番目の宿駅として、また東海道・中山道の分岐点として、その名が知られている。草津宿は草津村一カ村で構

図1 草津宿九「町」の位置



（註）『草津市史』5巻31頁「草津村の小字」より作成  
河川名は現行名で記載した

成されていた。村請単位としての草津村は草津村・草津宿双方の呼称が用いられていた。しかし、多くの場合は草津宿と記載されているため、村名は草津宿で統一することにする。

所領関係は近世初期に幕府領であった時期があるが、少なくとも寛永・一年（一六三四）以降は近世を通じて膳所藩領であった。文化一四年（一八一七）四月の「明細帳」によると、村高一五五七石余、家数四四二軒、人口二六四八人を数える大村であった。

草津宿の集落形態は宿内のほとんどの家が街道沿いに集まる街村形態となっていた。これら街道沿いの家並みは九つの「町」に分画されていた。これら九カ「町」の町名は、東横町、西横町、一町目、二町目、宮町である。各「町」の位置関係は図1を参照していただきたい。

宿役人の構成は、問屋四名、庄屋（名主）二名、年寄三（五名程度であった。史料を見る限りでは世襲ではなかったようである。しかし、村役人を輩出することが多い家がいっつか確認でき、村役人を輩出できる家筋が固定化されていたことが予想される。また、百姓惣代という役職が存在するが、藩から任命される宿役人ではなかったようである。詳細はⅢで言及する。

宿役人とは別に、各「町」ごとに組頭（町組頭）もしくは町年寄と呼ばれる役職が存在した。双方とも同じ役職の呼称であり、その人数は東横町の三人を除くと各「町」に二名ずつ存在した。彼らは家持層の内より選ばれていた。町内の寄合もしくは月ごとの廻番により、組頭が決められていたと記している史料もある。文政一三年（一八三〇）閏三月を境に組頭から町年寄へ呼称が変更された。明治年間に入ると再び組頭の呼称が使用されるようになる。現在の段階ではこの名称変更の理由は未詳である。

「町」には、組頭および町年寄の他に、町惣代、勘定方と呼ばれる役職が存在した。前者は史料上ほとんど出てこないため具体的な事項は未詳である。後者は町内の会計を担当する役職である。史料上「町役」という呼称が「町」を限らず比較的多く見出されるが、町惣代は史料上にほとんど登場せず、勘定方についても現在の段階では一目しかその存在は確認されない。そのため、「町役」という呼称は、多くの場合、組頭もしくは町年寄を指している可能性が高いと言える。

## Ⅱ 願書・届書への宿役人・各「町」組頭の署名の意味

本章では、文化一三年（一八一六）五月の「諸願添印帳」に記載されている願書・届書で膳所藩へ提出されたもののうちより、「町役」が署名したものと、宿役人の署名のみの願書・届書を抽出し、その性格の差異を分析することを目的とする。同文書の裏表紙には「庄屋」と書かれているため、同文書は庄屋の手により書き留められた手控えであることが分かる。

表 1 宿役人・百姓惣代署名史料項目別一覧

	文化13	文化14	文政01	文政02	文政03	文政04	文政05	項目別合計
農耕関係	4	3	3	3	2	3	2	20
砂川堤普請	0	2	1	0	0	0	0	3
開帳建礼届	0	1	2	0	0	3	4	11
事件届出	0	0	2	0	0	1	0	3
宿駅関連	5	3	4	0	0	4	5	21
救恤関連	1	1	5	0	0	0	0	7
氏神関連	0	1	0	1	0	0	1	3
訴訟関連	1	0	0	1	0	0	1	3
俵約令関連	1	0	0	0	0	0	1	2
宿財政関連	1	0	0	0	0	0	1	2
その他	0	3	1	1	0	1	0	6
年次別合計	13	14	18	6	5	10	15	81

（註）「諸願添印帳」より作成。

表 2 「町」組頭署名史料項目別一覧

	文化13	文化14	文政01	文政02	文政03	文政04	文政05	項目別合計
①盗賊被害届	5	9	2	0	0	7	6	29
②遺失物届	0	1	0	0	0	1	1	3
③屋敷建替願	0	2	1	1	0	3	2	9
④処罰御免願	1	1	1	0	2	3	2	10
⑤人別移動届	1	3	2	0	0	3	7	16
⑥経済援助	1	0	3	0	0	0	0	4
⑦町内借財	0	1	0	1	0	0	1	3
⑧金銭訴訟	0	3	0	0	0	2	0	5
⑨その他	0	1	0	0	0	2	3	6
年次別合計	8	21	9	2	2	21	22	85

（註）「諸願添印帳」より作成。

はじめに、表1～3について説明したい。表1・2とも同文書に記載されている願書・届書で膳所藩へ提出されたものを項目別に統計化したものである。そのうち、表1は宿役人または百姓惣代が差出人となっている願書・届書の統計である。それに対して、表2は各「町」の組頭の署名がある願書・届書の統計である。表1・2で取り上げた願書・届書一六六通のうち、最も多い宛先は双方とも「御奉行様」宛で、表1では七二通、表2では六八通である。その次に宛先が省略されているものが多く、表1では四通、表2では一四通となっている。その他には、表1では「両役所」が二通、膳所藩役人名が二通、「郡方御奉行様・御作事方御奉行様」が一通。表2では「三役所」が三通ある。膳所藩の支配体系では草津宿は在方として位置づけられているため、これらの多くは郡奉行に宛てられたものと考えられる。

なお、本稿では「町」や「町役」（具体的には組頭）の住民生活に対する役割を検討することが主題となるため、表2で取り上げた願書・届書は表3で一覧にして提示した。ただし、紙幅の都合上、宛先が省略されているもの、宛先が「三役所」となっているもの、一通全体が抹消線で消されているものなどは除外した。また、Ⅲでの分析の都合上、表1で取り上げた願書・届書のうち農業関係の願書・届書は表4という形で一覧にした。表4についてはⅢで説明する。

以後は主として、「諸願添印帳」に記載されている願書・届書などの諸史料を引用して論を進める。そのため、同文書に記載されている史料の順番を示すことにより、出典の記載に代えさせていただく。以後、無前提に史料一（表3参照）などという表記がある場合は「諸

願添印帳」よりの引用と理解していただきたい。

次に、組頭・宿役人の署名の基本的性格について説明したい。宿役人の署名について、ほとんどの願書・届書の末尾に、庄屋・年寄双方もしくはどちらか単独の署名が見られる。また、文政三年六月一日に、山内半介の弟伝七を野洲郡石田村石田庄左衛門へ養子に遣わす旨の願書（史料一三五）が見られるが、この願書の差出人の筆頭者は「年寄願主 山内半介」となっている。このことから、本来的に、宿役人の署名は願書・届書の奥書・奥印的な役割を持っていたと位置づけることができる。

組頭の署名について、表3に示されているとおり、差出人の筆頭に願主・届主である個人の署名が見られる時には、その願主・届主もしくはその関係者（具体的には親類など）と村役人との間に、差出人が所属する「町」の組頭の署名がなされる。また、史料一五二（表3参照）の差出人の筆頭者は「式町メ年組頭願主 平右衛門」となっている。このことから、本来的に、組頭の署名も願書・届書の奥書・奥印的な役割を持っていたと位置づけることができる。

紙幅の都合上、一覧として提示することはできなかったが、願主・届主の署名の他に村役人の署名があるのみで組頭の署名がない願書・届書が合計四五通書き留められている。このうち個人が願主・届主となっているものが三〇通。残り一五通の願主・届主は、寺院もしくは檀家惣代（史料上では門徒惣代・門家惣代・檀中惣代）が一通、神職が一通、本陣・脇本陣が二通、「草津宿踊り仲間惣代」が一通である。個人が願主・届主となっている三〇通の内訳は、宿役人が個人の

表3 文化13年5月～「諸願添印帳」(木屋本陣文書)のうち「町」組頭署名史料一覧

番号	年月日	表題(内容)	差出
11	文化13(1816)/08/	乍恐奉願口上書(私忤政次郎与申者行衛相知れ不申帳外二付)⑤	願主宮町 のふ、伯父 喜八、組頭2名、庄や兩人
13	文化13(1816)/08/21	乍恐奉願口上書(私宅江盜賊忍入旅人之内所持之代品物等取逃候二付)①	宮町届主 五兵衛、組頭2名、(庄屋)1名
20	文化13(1816)/⑧/04	乍恐一(彦根川原町米屋惣七荷物取逃二付)①	式町目宿 治郎三郎、組頭2名
28	文化13(1816)/11/	乍恐奉願口上書(当町与次兵衛借財相続二付親類・朋友共江相続之儀二付)⑥	願主三町目 儀兵衛、親類惣代 六右衛門、組頭2名、庄屋2名
29	文化13(1816)/12/19	乍恐御届奉申上口上書(四町目平太宅へ忍入銭筒等取逃二付)①	四丁メ 平太、組頭2名、庄屋1名
30	文化13(1816)/12/	乍恐奉願口上書(盜賊入込米式俵等相見不申二付)①	草津東横町 利助、組頭3名
32	/口/18	乍恐御届奉申上候口上書(盜賊忍入私所持之品盜取之儀二付)①	田中九蔵、組頭2名、庄屋1名
40	文化14(1817)/01/29	乍恐御届々書(町内佐助方へ盜賊入込二付)①	五丁目組頭2名、(庄屋)1名
42	文化14(1817)/02/	乍恐奉願口上書(追分村平左衛門後家娘さき私妻へ貰申度二付)⑤	願主草津宿東横町 口や卯八、組頭3名、庄屋1名
45	文化14(1817)/03/	乍恐一(私娘ぬい南笠村善右衛門方ニ遣シ申度二付)⑤	願主草津宿 伝次郎、組頭2名、庄屋1名
47	文化14(1817)/03/15	乍恐奉差上口上書(又左衛門宅へ盜賊忍入木綿等持逃二付)①	三町目 又左衛門、組頭2名、庄や
48	文化14(1817)/05/	乍恐願書(大島居村善兵衛・茂兵衛借銀之儀二付)⑧	草津宿宮町 善左衛門、組頭2名、庄屋2名
50	文化14(1817)/05/20	乍恐奉願口上書(盜賊入込店代呂物取逃二付)①	届主 いせや利助、組頭2名、庄や1名
51	文化14(1817)/05/	乍恐奉願口上書(私忤友蔵義帳外之儀御免之儀二付)④	草津宿五町目友蔵親 十次郎、一家惣代 八郎兵衛、組頭2名、庄屋2名
54	文化14(1817)/06/	乍恐奉願口上之事(盗人忍入銭等取逃二付)①	伏見屋徳兵衛、組頭1名、庄や
57		乍恐奉願口上書(盜賊忍入麻羽織等紛失二付)①	草津宿三町目届主 弥三郎、組頭1名、庄や
58	文化14(1817)/07/03	乍恐奉願口上之事(私隣藁葺借家大破二付瓦家二建替仕度二付)③	西丁願主 平兵衛、組頭2名、<庄屋1人>
59	文化14(1817)/07/12	乍恐奉願上銀子済証文之事(草津宿横町木屋権兵衛材木代銀不残受取二付)⑧	田上枝村 太右衛門、庄屋1名、木や権兵衛、組頭1名、年寄1名
62	文化14(1817)/07/20	乍恐御届々奉申上之事(美濃火野郡口井村利助等金子紛失二付)②	宮町届主 伝兵衛、組頭2名、庄屋
63		乍恐奉願口上之事(私所持請所字赤根川筋堤修復仕度之儀二付)⑨	願主 仁右衛門、組頭1名、(庄屋)1名
66	文化14(1817)/09/19	乍恐奉願口上之事(私持屋敷瓦屋根二建替申度二付)③	東町願主 孫七、組頭3名、<庄屋1名>
69	文化14(1817)/10/	乍恐奉願口上書(私娘りえ事同家山内孫右衛門方へ差遣シ度二付)⑤	嘉兵衛、組頭、庄や1名
71	文化14(1817)/11/21	乍恐奉差上返答書(矢倉村喜太郎より銀子利足算用御訴訟二付)⑧	五丁メ 忠兵衛、組頭2名、庄屋2名
78	文化14(1817)/12/15	御届書(口口院様御名目銀町内江拝借仕居候二付)⑦	式町目組頭2名、庄屋1名
79	文化15(1818)/口/09	乍恐奉願口上書(私借家瓦屋根二建替仕度二付)③	願主 甚七、組頭1名、<庄屋2名>
82	文化15(1818)/01/27	乍恐奉願口上之事(矢橋村長右衛門娘とめ私忤藤吉妻二貫度二付)⑤	五町目願主 勘右衛門、組頭1名、庄屋1名
83	文化15(1818)/01/20	乍恐奉願口上書(大坂西横堀瀬戸物丁毛馬屋伊兵衛等逃たり候品之儀二付)①	届主草津口(六カ)町目 新兵衛、組頭2名、庄や
86	文化15(1818)/02/18	乍恐奉願口上書(私娘口口矢倉村利兵衛へ遣シ度二付)⑤	草津三丁メ 治兵衛、組頭2名、庄や1名
88	文化15(1818)/02/29	乍恐奉願口上之事(東横町坂組又四郎等之御年貢并宿役金引負二付家居斗売払之儀二付)⑥	東横町坂組惣代2名、組頭2名、<庄屋兩人>
91	文化15(1818)/03/04	乍恐奉願口上之事(私儀借財相嵩取退請相企申度二付)⑥	願主六町目 安兵衛、組頭1名、庄屋兩人
93	文化15(1818)/03/11	乍恐内済口上之事(町内文六頼母子銀滞之分受取下済二付)⑥	高田清助、世話方 伝助、相手方 文六、町内組頭1名、庄屋1名
103	文政01(1818)/06/28	乍恐奉願口上上之事(井筒屋五兵衛義御追放御赦免之儀二付)④	宮町五兵衛妻子、親類 三郎兵衛、同武兵衛、同町組頭2名、年寄1名、庄屋1名
104	文政01(1818)/07/07	乍恐奉願口上之事(私宅盜賊忍入屏風等取逃二付)①	届主三町メ 卯兵衛、組頭2名、年寄1名、庄屋1名

113	文政02(1819)/01/	乍恐奉届口上之事(私共町内借財主法立二付) ⑦	式丁目組頭2名、年寄1名
115	文政02(1819)/01/03	乍恐奉願口上之事(私掛家敷瓦屋根二建替仕度二付)③	願主六丁メ 嘉兵衛、組頭2名、<(庄屋)1名>
147	文政03(1820)/08/22	[町内孫右衛門儀御咎御免之儀二付願書]④	組頭2名、庄屋1名
151	文政03(1820)/10/04	乍恐奉願口上之事(私共親類又四郎儀掃村御免之儀二付)④	一家惣代 十兵衛、同 勘四郎、中組 卯兵衛、組頭2名、年寄1名、庄屋1名
152	文政04(1821)/01/	[私居宅立替普請仕度二付願書]③	式丁メ乍組頭願主 平右衛門、組頭1名、年寄1名、<庄屋1名>
154	文政04(1821)/02/04	乍恐奉申上口書(忤清八儀御咎メ御赦免願二付)④	三丁メ清八親 卯兵衛、親類 喜兵衛、同、組頭代1名、年寄1名、庄屋1名
158	文政04(1821)/03/	[下笠村北岡伝左衛門忤蔵借銀取立之儀二付訴状]⑧	願主宮丁 太助、組頭2名、年寄1名、庄屋1名
160	文政04(1821)/04/29	乍恐奉願口上事(下笠村武兵衛町内伝兵衛引取度二付)⑤	伝兵衛兄 武兵衛、西横町組頭2名
165	文政04(1821)/06/02	[私義盜賊忍入店前二飭置候古手類取逃二付届書]①	一丁メ 喜三郎、組頭2名、年寄1名
169	文政04(1821)/07/24	乍恐奉願口上之事(当町内小右衛門忤寅吉儀出牢御免之儀二付)④	小右衛門親類惣代 喜平次、仁兵衛、組頭2名、庄や1名
177	文政04(1821)/10/22	[私方盜賊入込古たはこ入等取逃二付届書]①	届主東丁 山田や伝次郎、組頭1名、年寄1名
179	文政04(1821)/11/29	[盜賊入込候様子二而錢筒等紛失仕二付届書]①	東横町届主 權助、組頭1名、年寄1名
180	文政04(1821)/09/14	[私持家瓦葺二建替仕度二付願書]③	願主五丁メ 忠兵衛、組頭1名、<(庄屋)1名>
183	文政04(1821)/10/22	[私方嶋小財布等相見へ不申候全盜賊入込取逃候二付届書]①	届主東横町 山田屋伝次郎、組頭1名、庄屋1名
184	文政04(1821)/12/01	[拙宅往還通り二短刀落散有之二付届書]②	届主宮丁 左兵衛、組頭2名、年寄1名
185	文政04(1821)/12/07	乍恐奉受取口上書(盜賊取逃候小倉男帯等請取二付)⑨	草津東丁 山田屋伝次郎、組頭2名、庄屋1名
187	文政05(1822)/01/22	[旅籠屋店女日雇奉公人口入商売仕度二付願書]⑨	願主 弥五郎、東横町組頭2名、庄屋兩人
188	文政05(1822)/①/26	乍一(海老屋弥五郎儀旅籠屋店女日雇奉公人口入商売仕度二付)⑨	東横町坂組惣代2名、組頭2名
192	文政05(1822)/01/02	[私娘ゑん神領村与惣兵衛方へ遣し度二付届書]⑤	一丁メ 弥七、組頭2名、(庄屋)1名
194	文政05(1822)/02/01	[私共吞水質度二付四町目三町目往還堀割取水仕度二付願書]⑨	四町目 喜兵衛、平八、源助、孫七、三町目 平七、組頭4名、年寄1名
197	文政05(1822)/03/23	[盜賊忍入木綿等取逃候二付届書]①	届主貳町目 善四郎、組頭2名、年寄1名
206	文政05(1822)/08/27	乍恐奉届口上事(止宿候女所持金紛失仕二付)②	西丁届主 平兵衛、組頭2名、庄や1名
207	文政05(1822)/07/	乍恐奉届口上書(盜賊入込錢等取逃二付)①	宮町 彦根屋源蔵、組頭2名、年寄1名、庄屋1名
208	文政05(1822)/07/	乍恐奉願口上上之事(私居宅瓦屋根葺二建替仕度二付)③	草津宿六町目乍組頭 新兵衛、年寄1名、庄屋1名
214	文政05(1822)/08/27	乍恐奉届口上書(盜賊入込金子等取逃二付)①	宮町 五兵衛、組頭2名、年寄1名、庄屋1名
216	文政05(1822)/09/	乍恐奉願口上書(私借家瓦屋根二建替仕度二付)③	宮町願主乍組頭 茂八、同組頭1名、年寄1名、庄屋1名
218	文政05(1822)/09/06	乍恐奉願口上之事(町内音吉義御咎御免之儀二付)④	五町目組頭2名、年寄1名、庄屋1名
219	文政05(1822)/09/07	乍恐奉願口上之事(町内音吉義御咎御免之儀二付)④	親類惣代 忠兵衛、茂兵衛、組頭2名、年寄1名、庄屋1名
220	文政05(1822)/09/	乍恐奉願口上上之事(町内借財二付御講町内より加入仕高歩成借財相片付主法仕度二付)⑦	貳町目町惣代1名、組頭2名、庄屋兩人
221	文政05(1822)/09/17	乍恐奉届口上之事(盜賊入込錢等取逃二付)①	宮町 金八、組頭2名、庄屋1名
225	文政05(1822)/□/	乍恐奉願口上事(本家又四郎方へ私忤延次郎養子二差遣二付)⑤	孫兵衛、組頭1名

(註) 史料番号は史料の記載順。年月日欄の○内数字は閏月。  
表題欄の[ ]の記述は筆者が付した仮題。差出欄における表題後の○内数字は表2の項目を示す。  
差出欄の記載は役職名と人数のみとし、本稿の分析では人名は特に必要としないため原則的に省略した。  
差出欄における( )内の役職名は推定によるもの。差出欄における< >内の記載は奥書の署名。  
宛先が「御奉行様」と明記されているもののみ抽出した。

資格で願主・届主となっているものが六通、宿役人の親類が二通、有姓の者が一三通、無姓の者が九通である。なお、無姓の者が願主・届主となっている九通のうち二通は他村との銀子訴訟と酒株訴訟である。

以上の指摘点や、後述する宿役人差出の願書・届書の性格を考慮すると、各「町」の組頭の署名がない願書・届書は、寺社および宿内有力者に関わるものを中心になると言える。このことは裏を返せば、個人や家単位での願出・届出は基本的には所属する「町」の組頭の署名がなされていることを意味する。表3に表れている個人や家単位での願出・届出における組頭署名の多さはそのことを裏付ける。このことは、個人や家単位での願出・届出において、願主または届主↓願主または届主が所属する「町」の組頭↓宿役人（年寄・庄屋）↓膳所藩当局（多くの場合が郡奉行）というルートが確立していたことを示す。

ここで、表1・2を見ていただきたい。重なり合う項目がほとんどないことに気づく。表1によると、宿役人および百姓惣代が差出人となっている願書・届書は農業関係・宿駅関係といった宿全体に関わるものが多い。それに対して、表2・3によると、組頭の署名が見られる願書・届書は個々の個人や家の日常生活に密着したものが多く。

このような双方の願書・届書の差異は、宿・「町」が住民生活に果たした役割や、それぞれの結合の違いを反映するものと言える。このことについてはⅢ・Ⅳで述べたい。

### Ⅲ 住民生活と宿との関わり

前述したとおり、表1によると、宿役人および百姓惣代が差出人となっている願書・届書は農業関係・宿駅関係といった宿全体に関わるものが多い。双方とも二〇通程度を数える。表4は表1で農業関係の項目に分類された願書・届書を一覧にし、さらに細項目に区分したものである。同表によれば、農業関係のそれは、用水普請・浚い、田畑見分、農耕祈願の三つに分けられる。なお、紙幅の都合上、それ以外に分類される願書・届書については説明を控えさせていただく。

まず、農業関係の項目から説明したい。差出人の署名により、前述した三項目は、用水普請・浚いと、田畑見分ならびに農耕祈願の二つに分けられる。その基準は百姓惣代の署名の有無である。前者の用水普請等にはそれがなく、後者の二項目にはそれがある。では、この百姓惣代とはどのような存在であったのか。百姓惣代の署名があるのは、筆者が知る限り、この二項目のいずれかに分類される性質を持つ文書のみである。具体的には、不作による田畑見分願と、虫送り<sup>1)</sup>または雨乞いの執行願である。宿全体の利害関係だけでなく、場合によると他村との利害関係が絡むと考えられる用水普請や浚いをめぐる願書に、彼らは署名していない。このことを考慮すると、百姓惣代とは農業を生業とする者の惣代としての意味合いが強いと思われる。

前述の二項目の内、百姓惣代が署名していないものが、田畑見分願一通（史料一〇七 表4参照）、農耕祈願二通（史料五二・六〇）、計三通見られる。そのうちの一つでもある史料一〇七の末尾には「右

表 4 文化13年 5 月～「諸願添印帳」（木屋本陣文書）のうち農耕関係史料一覧

番号	年月日	表題	差出	項目
18	文化13(1816)/08/29	(東横町往還伏抜樋伏換願二付)	庄屋兩人	用水普請・浚い
22	文化13(1816)/⑧/19	乍恐奉願口上書(早稲方中田夏以来不順之儀二付)	百姓惣代2名、年寄2名、庄屋2名	田畑見分
23	文化13(1816)/⑧/19	乍恐一(用水樋修覆之儀二付)	年寄2名、庄屋兩人	用水普請・浚い
24	文化13(1816)/09/	乍恐奉願口上書(当宿御田地御廻村作毛御見分之儀二付)	百姓惣代2名、年寄2名、庄や兩人	田畑見分
52	文化14(1817)/06/	乍恐口上書(当宿御田地いもち入二付いもち送り願之儀二付)	年寄2名、庄屋2名	農耕祈願
56	文化14(1817)/07/05	乍恐奉願口上之事(当宿田地旱損二付氏神江相籠申度二付)	草津宿百姓惣代2名、年寄2名、庄屋2名	農耕祈願
60	文化14(1817)/07/17	乍恐奉願口上之事(当宿御田地旱損二付為雨乞氏神江笹踊仕度二付)	年寄1名、庄屋兩人	農耕祈願
105	文政01(1818)/06/03	乍恐奉願口上之事(当宿御田地旱損二付氏神へ相籠申度二付)	百姓惣代2名、年寄3名、庄屋1名	農耕祈願
106	文政01(1818)/07/08	乍恐奉願口上之事(為雨乞氏神へ相籠候得共一雨も無御座依之宮籠仕度二付)	百姓惣代2名、年寄3名、庄屋1名	農耕祈願
107	文政01(1818)/09/20	乍恐奉願口上之事(当宿御田地早稲方取実無数猶又中晩田稔面見苦二付御見分之儀二付)	庄屋1名	田畑見分
112	文政02(1819)/01/11	[当宿込田池井湯川筋浚仕度二付願書]	年番2名、年寄1名、庄屋1名	用水普請・浚い
123	文政02(1819)/06/晦	乍恐奉願口上書(当宿御田地いもち入候二付虫送仕度二付)	草津百姓惣代1名、年寄1名、庄屋1名	農耕祈願
125	文政02(1819)/09/23	乍恐一(字大門池井字新池用水樋御見分之上御仕替御願二付)	年寄2名、庄屋1名	用水普請・浚い
139	文政03(1820)/07/晦	乍恐奉願口上之事(当宿御田地いもち入二付虫送り仕度二付)	百姓惣代1名、年寄1名、庄屋1名	農耕祈願
148	文政03(1820)/09/10	[当宿御田地御廻村御見分之儀二付願書]	百姓惣代2名、年寄1名、庄屋1名	田畑見分
164	文政04(1821)/05/16	乍恐奉願口上之事(当宿御田地旱損二付為雨乞氏神二参籠仕度二付)	百姓惣代2名、年寄2名、庄屋2名	農耕祈願
174	文政04(1821)/09/08	[当宿御田地旱損并大風二付御廻り之砌御見分之儀二付願書]	百姓惣代2名、年寄1名、庄屋1名	田畑見分
178	文政04(1821)/11/02	[埋樋・門樋等取繕二付願書]	年寄1名、庄や1名	用水普請・浚い
204	文政05(1822)/06/20	乍恐奉願口上之事(当宿田地いもち入候二付虫送仕度二付)	百姓惣代1名、年寄1名、庄屋1名	農耕祈願
217	文政05(1822)/09/06	乍恐奉願口上之事(当宿御田地いもち入二付御廻村御見分之儀二付)	百姓惣代2名、年寄1名、庄屋2名	田畑見分

(註) 史料番号は史料の記載順。年月日欄の○内数字は閏月。表題欄の[ ]の記述は筆者が付した仮題。  
差出欄の記載は役職名と人数のみとし人名は省略した。



ハ出張之節俄ニ認メ差出候ニ付年寄并百姓惣代名印共なし」と記されている。このことは、本来的には史料一〇七のような田畑見分願を藩に提出する時には、庄屋の他に百姓惣代と年寄の署名を必要とすることを示している。それと同時に、それが叶わない時には百姓惣代の署名なしで村役人の署名のみで差し出すことが可能であることを意味する。残る農耕祈願願も田畑見分願と同じ差出人構成となっているため、この関係性は農耕祈願願にも適用されると考えられる。

このことは、庄屋・年寄が農業を渡世とする者の代表としての意味を併せ持つと同時に、宿全体の結合が農業共同体としての性格を持っていたことを示しているように思われる。前述したように、用水普請や浚いを庄屋・年寄が願い出ていることは、筆者の指摘を裏付けるものとして位置づけることができるであろう。

次に、宿駅関係の願書・届書も多く見られ、表1に示した通り二一通となる。このうち最も多いのが、東海道・中山道両口の渡所修復で九通である。本陣諸設備修復三通、往環筋道普請一通、矢倉村境黒門修復願一通を併せると宿駅施設の普請関係は計一四通を数える。この他には、御茶壺台修復関連が二通、宿役人勤方書上（以下、一件ずつ）、雲助追善石碑建立願、貫目改所手当願、問屋役婦役願、病人村継送願があげられる。これらの願書・届書を宿役人が差し出すことは、草津宿が交通政策上の行政単位となっていることに求められよう。ただし、最後にあげた病人村継送願（史料二二二）は他のものと若干趣を異にする。その点とは、他の願書・届書が宿役人の裁量で業務遂行が完結するのに対して、この業務遂行には個々の家や「町」の協力が不可欠

であつたと思われることである。まず、史料本文を左に記す。<sup>12)</sup>

#### 乍恐奉願口上之事

一私シ儀紀州海野郡梅原村住居之者にて為猿舞渡世仕、此□勢州より国元へ罷帰り候処、道連同村太蔵娘まさ申者、旅中にて病氣ニ取合、於当所歩行も難相成難洪者之儀ニ御座候へハ、召連帰り候路銀も無御座候、誠ニ難儀迷惑仕ニ付、無抱此段奉願上候間、何卒格別之以御慈悲ヲ右病人儀送り御仕出し成被下候様奉□□、尤途中にて死去等仕候ハ者私シ付添罷在候儀ニ付、其所にて差配仕、御当所へハ少も御難掛申間敷候間、何分此段御聞済被成下置候ハ者難有仕合可奉存候、已上

紀州海野郡

梅原村

猿引

弥吉

草津宿旅宿

山田屋伝次郎

組頭

吉兵衛

利右衛門

御役人中

右之通私シ共まで願出候付御届奉申上候、已上

問屋

田中七左衛門

庄屋

深尾又五郎

御奉行様

この史料形式からも分かるように、病人の村々継送願は、願主である旅人および旅宿が旅宿のある「町」の組頭を通じて宿役人中に提出し、さらにそれを宿役人が膳所藩郡奉行に提出するという、Ⅱで言及したルートに則って提出されることが確認できる。このことは個々の旅宿で起きた事件などを宿役人が把握する場合には「町」が果たした役割が大きかったことを示唆するものである。なお、この願書には町名が付されていないが、これは例外的な事例である。通常は、個人や家が願主となる場合には彼らの肩書に、組頭が願主となる場合には組頭の肩書に町名が付される。このことは表3に示されている通りである。

以上のことから、宿の特質をひとまず左記の三点にまとめることができる。

- ① 地方支配の行政単位
- ② 交通支配の行政単位
- ③ 農業共同体としての側面

## Ⅳ 住民生活と「町」との関わり

Ⅱで述べたように、組頭の署名がみられる願書・届書は個々の個人や家の日常生活に密着したが多い。このような傾向は「町」が

住民生活と深く関わっていたことを示している。ここでは相互扶助機能の考察を通じて、このような「町」の性格を明らかにしたい。結論から述べると、「町」の相互扶助機能として、左記の三つを確認することができる。

- ① 年貢・伝馬役代金皆済のための経済的援助
- ② 犯罪者の処罰免除・減刑嘆願
- ③ 町内の秩序維持

①の年貢・伝馬役代金皆済のための経済的援助については、以前にも紹介したことがある。<sup>13</sup>この時には、「町」が未進者の親類に対して援助を求めたり、町内で頼母子講を開催して未進分の銀子を集めている事例を紹介した。表3にあげた史料で、これに直接的に関わるものは史料八八があげられる。では、同史料本文を左に紹介したい。

乍恐奉願口上之事

一東横町私共組内困窮弥増、御年貢并宿役金等難相立候ニ付、又四郎・源次郎・権兵衛・与吉四人之者共家屋敷町・組へ差出し、当時借家仕居候、然処右之者共不納仕置候御未進米并役金町・組へ引負ニ相成御座候間、右屋敷相望候者も無御座候ニ付、此度家居斗売払少分ニ而も右成方足銀仕度奉存候、尤明屋敷之儀ハ町並も悪敷相成候事故早々相望候者共聞合、急々家作為致可申奉存候、何卒御憐愍之上右こほち家之御願御免被成下候様偏ニ御願奉申上候、已上

（差図略）

（文化・九年）  
二月廿九日

東横町坂組

惣代

卯兵衛

同

助四郎

組頭

六左衛門

同

善五郎

右願之通相違無御座候、以上

庄屋兩人

御奉行様

この史料によると、又四郎ら四人の年貢・伝馬役代金の未進分は東横町ならびに町内坂組の引負となっており、彼らの屋敷地も東横町ならびに坂組へ接收されていることが分かる。しかし、「町」および「組」に接收された屋敷地は買い手がなかった。そのため、「町」および「組」側は「家居」（用材および建具などカ）だけでも売り払い、引負分の返済に充てる方針をとり、家屋敷の取り壊しを藩に願ひ出ていることが分かる。

このことから、未進者が支払えない場合は「町」や「組」がその未進分を引き受ける事例が存在したことが分かる。文政一〇年（一八二七）一〇月に西横町組頭平兵衛らが膳所藩郡奉行に差し出した「御願書」によると、西横町内に居住する助之丞の年貢・伝馬役代金の未進分を西横町が引き受けることについて、「町内へも損難多相掛り、割

かけ候へハ忽二・三軒も潰家出来一統難渋仕候」と述べて回避している。このような事態を回避するということは、町内住民の負債を「町」が肩代わりするという選択が比較的多く見られたか、期待されていたことを示す。すなわち、「町」が町内住民の負債を引き受けるという選択自体は決して例外的なことではなかったことが窺われる。

又四郎ら四人の負債を「町」および「組」が引き受ける際に、彼らの家屋敷を「町」および「組」に差し出させていることが注目される。なぜなら、これらの家屋敷が「町」および「組」が引き受けた負債を返済する財源となるためである。さらに、このことは「町」による屋敷地や建物の共同体的所有権が存在していたことを予測させるが、その解明については今後の課題としたい。なお、史料上では、「町」内部の「組」は東横町や宮町といった他「町」より規模が大きい「町」にその存在が確認される。これらの「町」では内部集団である「組」が「町」の機能の一部を担っていたのであろうか。

「町」および「組」による未進者の負債引受は、坂組に大きな負債をもたらした。史料九七によると、坂組の負債に対して「地下方」（地方支配に関わる宿役人のことカ）よりも手当したが効果がなかったため、庄屋高田次郎八・年寄庄兵衛が膳所藩へ銀五貫目の拝借を願ひ出ていることが分かる。ここで注目されるのは、実際の未進分の皆済に尽力したのが「町」および「組」であったにもかかわらず、藩へ拝借銀を願ひ出る主体が宿役人であることである。このことは、草津宿という単位が地方支配の単位でもあったことに由来すると思われる。

次に犯罪者の処罰免除・減刑嘆願および町内の秩序維持について述べたい。結論から述べると、この二つは同じ物事の表裏をなすものである。表2によると、処罰御免願の項目に分類される願書・届書は一件あり、組頭が署名する願書・届書の中でも多い部類に入る。

この項目に分類されている史料の一つである史料五一（表3参照）には、「私忤友藏義身持不行跡ニ付、町役并親類共段々異見を加へ候得共、行作直り不申候ニ付、去ル戊年帳外之儀御願奉申上候処」と記され、組頭と親類が友藏に対して意見を加えた上で、一旦は藩に対して人別帳よりの削除をお願い出たことが分かる。この願い出は藩に聞き入れられ、友藏は人別帳より削除された。続いて、同史料には「忤友藏義所々ニ流浪致シ難渋仕罷在、親共之厚恩を思ひ、先非を悔、此上者親共太切ニ仕、実体ニ相稼可申候而、婦參御願申上呉候様親類共迄度々頼越候ニ付、実否聞札候処相違度無御座候ニ付、不顧恐此度友藏婦參之儀御願奉申上候」と書かれ、友藏が反省したことを受けて親類らが何度も友藏の婦參をお願い出たため、友藏の婦參をお願い出る願書が作成されたことが分かる。前述したように、親類らの願い出を受けて願書を作成したと記されているため、この願書を実際に作成したのは五町目組頭であると考えられる。

以上のことから、町内の身持ちが悪い者に対する説諭や、人別帳からの削除といった人身に対する処分に至るまで「町」が深く関与していることが分かる。そして、町内の身持ちが悪い者が「町」や親類の手に余るようになれば人別帳よりの削除をお願い出る一方、反省すれば彼の婦參をお願い出るといった動きに、帳外願および赦免願が町内の秩

序維持の道具として用いられていることを窺うことができる。先に、犯罪者の処罰免除・減刑嘆願および町内の秩序維持は表裏一体のものであると述べた意味はここにある。

### むすびにかえて

以上の分析から、共同体的な問題関心に引きつけて述べると、宿が農業共同体としての特質を有していたのに対して、「町」は宿内住民の生活共同体としての特質を有していたことが分かる。このような機能上の分担関係が見られることから、宿・「町」双方の住民結合がそれぞれ独自の位置づけを有していたことが窺われる。「町」が宿内住民の生活共同体としての特質を有するに至った要因の一つとして、「町」が商業共同体とも言うべき側面を有していたことがあげられる。

そのことを示す例の一つとして、史料一八七・一八八（表3参照）があげられる。双方とも海老屋弥五郎が旅籠屋で働く女日雇の口入商売を行いたい旨を藩に願い出た願書である。前者の差出人は、願主弥五郎、東横町組頭吉兵衛・甚七、庄屋兩人。後者の差出人は、東横町坂組惣代助四郎・卯兵衛、組頭甚七・吉兵衛である。ここで注目されるのは、これらの願書の文中に「右町明地面へ罷越、小家ニ而も取締、旅籠屋店女日雇奉公人口入商売仕、町々留メ女召抱出来不申候旅籠屋共へ世話致遣候ハ、自然与往来之旅人足留メも相成、町方旅籠屋者不及申、東横町共賑々敷相成」（史料一八七）や、「此度海老屋弥五郎儀当組内へ罷越、奉公人并日雇口入商売仕度段相願被申候、左候へ者

自然<sup>1</sup>人寄も宜敷賑ひニ相成、行々町・組繁昌之基ニも可相成奉存候」(史料一八八)と記されていることである。すなわち、女日雇の口入れ商売を誘致することが、草津宿全体や東横町ならびに町内坂組の繁栄に繋がるということが主張されている。この問題は史料一八八の存在に表れているように、商売を行う個人の問題のみならず、「町」や「組」の問題としても捉えられていたことが分かる。

深井甚三氏<sup>16</sup>により、文化初年(一八〇四)の景観として、草津・石部両宿は六〇〇軒未満ではあるものの、裏通り・小路家並みの発達が見られたことが指摘されている。また、水口<sup>17</sup>草津間は、それ以後の東海道の宿駅に比して、寄棟草屋と特に蔵造りが目立つ町並みを有していたことが指摘されている。このように草津宿は比較的発達した町並みを有していたことが分かる。文政九年(一八二六)のことであるが、脇本陣や脇本陣であった旅籠屋五軒のうち持高が一石に満たないものが二軒ある。おそらく彼らは旅籠屋を専業で営んでいたと考えられる。このように草津宿は比較的、都市的な発展が見られた宿場であり、特に農業に従事しなくても生計を立てることができる環境は存在していたと考えられる。そして、「町」が住民生活に対して深く関わるという状況が成立した一因として、このような都市的な発展があったように考えられる。

(はじめに)で述べたように、在方町の都市的發展により「町」結合が顕在化すること自体は既に渡辺浩一氏により指摘されている。氏の研究では、武蔵国粕壁宿における「町」結合の顕在化の背景として、地方組織としての「名主組」が都市社会特有の分別家創出や本百姓株

の譲渡・移動により地縁的まとまりが崩壊したことが指摘されているにすぎない。すなわち、都市的發展により農村的地縁結合が崩壊し、新たに「町」という都市的な地縁結合が顕在化するという議論であり、住民結合形態としての地縁性の問題が組上にあげられているにすぎない。

このように、氏の研究では農業に関わる問題が議論に組み込まれていないという問題点がある。この問題点はすでに氏の認めるところであったが、現在に至るまで農業と商業の問題を絡めた形で「町」結合の独自性を探る研究はなされていない。それに対して、拙稿はそのような視点からの分析を行う一つの方法を提示し得たと思う。ただし、議論に組み込めなかった問題点も数多くある。その中でも重要なものは、「町」結合の顕在化を時代の流れの中に位置づけることに成功しているとは言えないことであろう。これについては今後の課題としたい。

#### 注

(1) 在方とされる地域に存在する都市的な場のこと。従来、このような都市的な場は、研究課題の別により在郷町や在町など様々な名称が用いられてきた。これらの名称を大きく括る名称として渡辺浩一氏により提唱された。詳細については、渡辺浩一『近世日本の都市と民衆』(吉川弘文館、一九九九年)序章を参照していただきたい。

(2) 渡辺浩一「近世後期における在方町の住民結合」、同「都市的住民結合の存立条件」、同「在方町の惣町的結合」、同「在方町における「町」結合について」(以上、渡辺前掲書、これ以後は順に渡辺論文Ⅰ・Ⅳと略す)、深井甚三「加賀藩御郡所町、小杉新町(小杉宿)の町立てと地

縁的結合」（丸山雍成編『日本近世の地域社会論』、文献出版、一九九八年）、同「宿と町」（『幕藩制下陸上交通の研究』、吉川弘文館、一九九四年）、田中喜男『近世在郷町の研究』（名著出版、一九九〇年）、乾宏巳「摂津池田における町共同体」（中部よし子編『大坂と周辺諸都市の研究』、清文堂、一九九四年）、同「畿内在郷町における民衆運動と村政機構の改革」（『大阪教育大学紀要第Ⅱ部門』三三―一、一九八三年）、松下万里子「畿内在郷町における町政機構」（梅溪昇教授退官記念論文集刊行会編『日本近代の成立と展開』、思文閣出版、一九八四年）、川合賢二「天保のお蔭踊りと村政改革」（『ヒストリア』七六、一九七七年）、鶴美子「近世伊丹の町政組織について」（『地域研究いたみ』九、一九七八年）

（3）前掲渡辺論文Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ。また、乾宏巳氏による摂津国池田の研究（前掲乾・松下・川合論文）によると、池田は中世から発達した町場であり、寛永期には二〇余もの「町」が存在していた。しかし、延宝期にそれを無視した形で村政組織が五株に分けられた。そのため、都市化の進展とともに矛盾が生じ、化政期および天保期を期に村政組織における「町」の役割が増大したことが指摘されている。

（4）拙稿「江州草津宿における村政機構と『町』共同体」（『佛敎大学大学院紀要』二七、一九九九年）。

（5）『草津市史』二（一九八四年）、三二頁

（6）『草津宿庄屋の記録』（『草津市史史料集』四、一九九五年）三七―五二頁

（7）『草津市史』五（一九九〇年）六章「草津宿関係年表」や、同巻掲載史料によると、田中九藏家、田中七左衛門家（以上、本陣家）の他、太田、高田、竹村、辻、深尾、山内などの苗字を持つ者が比較的多く確認できる。

（8）特に断らない限り、「町」に関する説明は拙稿（註4参照）による。

（9）小林博編「東海道草津宿関係史料」一八（『大阪経済法科大学論集』五六、一九九四年）史料番号一五―一三―九

（10）木屋本陣（田中七左衛門家）文書

（11）稲作に害をもたらす虫を追い払う儀礼。

（12）引用史料中に「紀州海野郡梅原村」と記されているが、梅原村は名草郡に属する村である。なお、紀伊国には「海野郡」という郡は存在しない。似た名称の郡としては、名草郡の隣郡に海部郡という郡がある。

（13）注（4）参照

（14）木屋本陣文書。『草津市史』六（一九九一年）四九五―七頁に読み下し文が掲載。

（15）宮町における町内の「組」は、『草津市史』五（一九九〇年）、四六〇頁参照。なお、各「町」の軒数については拙稿（註（4））を参照していただきたい。

（16）深井甚三「東海道宿場町の発達と景観」（深井前掲著書）

（17）『草津市史』二、四五九頁

〔付記〕草津宿本陣館長田中文子氏には史料の利用を快諾していただいた。草津市教育委員会八杉淳氏・岩間一水氏には史料閲覧など色々とお世話になった。記して謝意を表したい。

（いで つとむ 文学研究科日本史学専攻博士後期課程）

一九九九年十月十五日受理